



桜花散り、新しい時  
が始まろうとする4  
月、上野の国立西洋美  
術館に「グエルチーノ  
展」を見に出掛けた。グ  
エルチーノは、20世紀  
まで長く忘れ去られ、  
日本でもほとんど知ら  
れていない17世紀イタ  
リア・バロックの画家。  
それと知らず、私にと  
っては、長く気になっ  
ていた名前である。

25年前、ある素描  
版画に出合った。まさ  
にグエルチーノの原画  
によるエッチング。題  
は「右手を上げた女」  
である。焦げ茶色の柔  
らかな線から、何とも

不思議な魅力が漂い、  
上げた右手前方を見つ  
めるターバンの女。い  
ったい何者なのだろう  
と思いついてきた。そ  
して、グエルチーノと  
密な油彩のリアルさに

読者エッセー  
謎解き  
「グエルチーノ展」  
古畑 博子 (66歳・松本市波田)

は、どんな画家であつ  
たのか。ふたつの謎に  
応えるかのような、こ  
のたびの初来日は、  
「まさか」の驚きと喜  
びであった。

2012年5月、イ

タリア北部大地震が、  
グエルチーノの故郷チ  
ェント市を襲った。美  
術館（今なお復旧のめ  
ど立たず）倒壊を避け  
て運び出され、被害を  
免れた作品が、日本で  
公開されることになっ  
た。ゲートルやベラスケ  
スが足を運び、行かな  
ければ見ることができ  
なかつた天井画まで、  
日本で鑑賞できると  
は、何という巡りあわ  
せであろう。

さて、一步一步館内  
を進んでいくと、ター  
バンの女がいたのだ。  
それは、「巫女(みこ)」  
であった。巻物を手に

こちらを振り向いてい  
る。長年の謎が解けた  
瞬間であった。  
「右手を上げた巫女」  
は、350年昔、右手  
を向けた天からどんな  
啓示を受けたのだろう  
う。何を祈ったのか。  
地震がなかつたら、タ  
ーバンの女は謎のま  
ま、永久に知ることも  
見ることがなかつたグ  
エルチーノである。  
折しも、ネパールの  
地震。自分のささやか  
な思いさえも、地球の  
ありよつに全てつなが  
っていると気付いた。  
謎解き「グエルチーノ」  
展であった。